

調平正

引つ越しの荷物
は、ささやかな
ものだった。自
ら引いた荷車に
くくつたのは、

布団と二つの行李こぶり、それ
に竹製本棚一つ。行李に
は衣類と本が詰まってい
た◆賀川豊彦が自伝的小
説「死線を越えて」に書
く引つ越しの一場面だ。

向かったのは十軒続きの
長屋である。部屋は、表
が三畳、奥が二畳。お金
がなかったもので、うち三
畳分しか古畳を敷けず、
障子もお古だった。ラン
プを買えないまま、暗闇
の中で新しい暮らしが始
まった◆これが一九〇九

(明治四十二年十二月
二十四日のことだ。神戸
の貧しい人々が住む地域
で布教活動しよう。そ
う決意しての引つ越しで
ある。社会活動家として
名を残す賀川だが、その
波乱の人生が、この荷車
引きから始まったといえ
る◆ことしのクリスマス
イブで、ちようど百年と
なる。神戸文学館(神戸
市灘区)はすでに、「献
身百年」と題した企画展
(二月二十四日まで)を
始めた。活動の拠点だっ

た生まれ故郷の神戸を中
心に、多様な足跡をあら
ためて振り返る年になる
だろう◆貧しさを生まな
いたための労働、農民運動
や協同組合、世界連邦運
動……。実に幅広い活動の
底には、どんな精神が流
れているのか。賀川が種
をまいた一つ、コープこ
うべの講演会でかつて、

武田清子国際基督教大学
名誉教授が「社会を決し
て高みから見下ろさない
信念」と表した(コープ
こうべ七十年史)。常に
弱い立場の人々に寄り添
う姿勢と言い換えてもい
い◆貧富の差が渦を巻く
時代を、賀川は生きた。

荷車を引いて渦中へ飛び
込む青年の姿は、格差に
きしむ現代から見ても、な
んと刺激的なことか。